メインシナリオ／サイド第４回
『滅びを望む者たち　第４話』個別リアクション

『密談』

　接近者への警戒、周辺探索の為に囚人の多くが小屋から出ている時間に、ロスティン・マイカンはトルテを呼び、小声で話しかけた。
「届けられる食糧に、盛られる可能性がある」
　ロスティンのその言葉に、トルテは驚きの表情を浮かべたがすぐに首を左右に振る。
「お前がいるのに、それはないだろう。騎士団は非情だが、人質を見殺しにするとまでは考えられない」
「盛られる可能性のある食糧を教えるから、それは廃坑側や重犯罪者へ分ける手配すると、交渉の際騎士へ密かに伝達するんだ」
「……何故だ？」
　ちらりとトルテは重犯罪者を見た。
　小屋の中にいる重犯罪者は一人のみで、ドアの側で警戒を払っている。
「廃坑の奴等や一部の重犯罪者はお前でも制御はできないだろ？」
「……」
「警備隊も奴等を野放しにしたくないはず。一緒に討伐されたいか？」
　トルテは首を左右に振った。
「それに船すら壊しそうな奴等と一緒にいられるか？」
「確かに奴らは大して魔力もないし、足手まといでしかないんだが……」
　迷っているトルテに、ロスティンは真剣に語りかける。
「騎士団にそう言うだけでいい。後はあっちがやってくれるだろうし、危険を排除できるならと交渉に応じるはずだ」
　トルテは眉間にしわを寄せてしばらく考えた後、首を左右に強く振った。
「……だめだ。それこそ人のすることじゃねぇ」
「？」
「脱走しようと持ちかけたのは、俺らだ。あんな奴らだけど手を組んだ仲間で、血の通った人間なんだ。そんな卑劣なこと……俺のせいで殺されるかもしれねぇこと、出来るわけないだろ！
　それに、廃坑の奴らとは考えが違うが、別に困らされてない。奴らも加害者だけど、不当な扱いを受けた被害者でもある。俺らよりずっと待遇悪かったみたいだし、政治犯扱いで捕まった奴らなんて、ホント不憫だと思ってる」
「そうか……」
　しかしそうなると、ロスティンとしてはとっても困る。
　無事帰って自堕落に生きたい。そのために今だけ頑張ってるというのに！
　騎士団が強硬手段に出た時に、自分の命が危ない。五体満足で帰れる可能性はまずないだろう。このままでは！
「ま、まあ、盛られるといっても俺がいるんだ、食べたら即死っていうものじゃないだろうし、町民会議が上手くいけば、そんなことしてこないだろうしな」
　脱走者たちが不当に拘束されていた事実が認められてから、騎士団がそのような手段をとったのなら、町の人たちが黙っていないだろう。
　町民会議が成功すれば……。
（ん？　で、その会議って……廃坑の奴らが出るんだよな。
　ヤバイんじゃないのか、これは！？）
　こちらのメンバーは会議でどのように認めてもらうかなど、考えてなかったのである……。

こちらのリアクションは以下のＰＣに発行されています。
ロスティン・マイカン